

コンピュータを用いた英語授業の試み

人文学部 大石 強・人文学部 秋 孝道・人文学部 福田一雄・人文学部 駒形千夏

Computer Assisted English Teaching

Tsuyoshi OISHI, Takamichi AKI, Kazuo FUKUDA and Chinatsu KOMAGATA

We opened 6 computer assisted English classes in 1997. We have three reasons for organizing such classes. Firstly, We want to increase the variety of English classes. Secondly, most of the class time should be allotted for the students' task of practicing the skills of language learning. Finally, the use of 50 personal computers in a class will enable each student to study English at his own pace.

To make adequate preparations for the classes, two of us went to Chiba University to inspect the computer assisted English classes in December of 1996. The results of their research in English teaching have revealed that the development of one's listening ability has a considerable effect in improving his other abilities in English. They have evolved "the three round method" for the development of listening skills, and developed the courseware accordingly. Following the results of their research, we decided that priority should be given to the listening activities.

Near the end of the second semester, we used a questionnaire to survey the students' attitudes to the classes. Some interesting information was obtained through the questionnaire. The experience of computer assisted English teaching has also taught us a lot of things. For example, such a method alters the traditional role of the teacher greatly. Because it is possible for each student to attend to a different task in a class, it is necessary to prepare well-designed class-work for the students with various interests and abilities.

Key words: computer assisted, students' task, listening skills, class-work, questionnaire

1. はじめに

コンピュータを利用した英語授業は、英語教育授業改善の中で議論されてきた授業形態・授業内容の多様化と学生の自主的・積極的学習の一つの方法として位置づけられる。英語担当者の間では、授業において教員が多く時間を使って知識の伝達をするのではなく学生自身が考えて学習する時間を大幅に増やすという目的を実現する手段として、コンピュータを利用してみようという話が平成7年度頃から出てきた。同時に、コンピュータを利用することにより、クラス一斉に同じ進度で行われる授業から学生個々の進度に合わせた授業へと転換できる可能性も検討されていた。

マルチ・メディア教室が教養校舎に設置され、語学授業にコンピュータが利用できるようになったのは平

成8年度からであったが、設置が正式に決まったのは前年度末に近かったため、平成8年度の授業計画がほぼ固まっていた状況であった。それでも、コンピュータを将来の語学授業に利用していきたいと考えていたところであったので、英語担当者の中でコンピュータに慣れている秋孝道が急遽シラバスを書き直し、実際にマルチ・メディア教室で1コマ授業を行ってみて授業形態や操作上の具体的な問題点を洗いだし、平成9年度からもう少し本格的に取り組もうということになった。また、平成8年11月26日には、コンピュータ利用の語学教育で先んじている千葉大学に大石強と秋孝道が視察にいつて参考とした。

このようにして平成9年度から人文学部、理学部、工学部でそれぞれ2クラスずつコンピュータを用いた英語授業が開設されることになった。このクラスはそ

それぞれ60時間2単位のもので、週2回行い半年で完結する Semester 制で行われた。各学部とも第1期と第2期に週2回のクラスが1つずつ設定された。担当者は大石、秋、福田一雄の3名で、マルチ・メディア教室の授業ということで駒形千夏の援助を受けることになった。その間、上記4名で何回かの授業打ち合わせ会を開き平成9年度の授業を実施した。以下、時間の流れに従って、打ち合わせ会で検討したことをまとめておくことにする。

【平成8年度授業の準備：教材選択】

平成7年度の教養英語教育活性化プロジェクトで大学教育開発研究センターより予算を頂き、コンピュータ利用による英語教育のための教材をウィンドウズ版、マック版の両方について収集し検討していたところ、次の理由によりマック版『Quick English (2.0) 日常会話1』(INS株式会社)を使うことにした。

- ①マルチ・メディア教室にマッキントッシュのコンピュータが導入されたこと。
 - ②ハードディスク上に余計なものが残らないように使用するという教室条件に合うこと。
 - ③初心者にとって簡単に操作できること。
 - ④大学1年生のレベル・内容に合っていること。
 - ⑤各学生が個々のペースで使用できること。
- ④については、日常会話の色々な場面に必要な英語表現が自然な会話速度と内容で含まれており、文法・語彙・文化についての解説がかなり詳細に含まれている。特に、練習問題やビデオを用いた聞き取りテストがランダムに出て来るようになっている点が評価された。また、発音練習、会話練習、ゲーム形式の問題も内蔵されていた。⑤については、CD-ROMを受講生の人数分用意して、各学生のコンピュータでそれぞれ学習してもらおうと考えた。『日常会話1』は人文ブロックの英語授業経費で揃えられ、平成9年度に使うことになる『日常会話2』はセンターの経費で揃えられた。

【平成9年度第1期授業の準備】

平成8年度末に平成8年度の授業の様子を参考にしながら平成9年度第1期の授業計画について検討し、下記のことを決めた。同時に、秋以外は必ずしもコン

ピュータ操作に慣れているわけではないので、マルチ・メディア教室で実際に予行演習を行った。なお、教材は『Quick English 日常会話1』を継続して使うことにした。

- ①ソフトを預けるだけで学生の自主的・積極的学習を期待するのには限界があるので、個々の学生のペースを尊重しながらも一定の共通課題を与えて学習成果を毎回確認する必要がある。
- ②共通課題は聞き取りと英作文の課題とし、教員の方で毎回準備する。
- ③平成8年度の経験から、課題作成と添削には相当な時間を要することが判明しているが、今後の資料蓄積のために平成9年度は各教員がそれぞれ新たに色々な課題作成をしてみる。
- ④学生がコンピュータの操作を確実に覚えられるように第1回の授業90分をそのための時間にあてる。また、2～3週経過するまで毎回、基本操作の説明を繰り返す必要がある。

【平成9年度第2期授業の準備】

平成9年度の秋休み中に第1期の授業の反省と第2期の授業についての検討を行い、下記のように決めた。なお、教材として『Quick English 日常会話2』を使うことが前年度の授業計画時において決められている。

- ①リスニング能力と英作文能力の両方を同じように重点的に訓練するのは中途半端になりがちであるとの反省から、第2期の授業ではリスニング能力の訓練に重点を置く授業を試みることになった。
- ②ただし、課題作成は今後の資料蓄積のため聞き取りと英作文の両方について引続き行う。
- ③教育効果を目に見える形で測定してみようということで、学期初めと学期末とにTOEFLの聞き取りテストの部分を用いて、各学部の受講生に共通のリスニング・テストを実施して結果を比較することになった。
- ④次年度の授業の参考に受講生の意見を聞くアンケート調査をすることを決めた。
- ⑤学生にリスニング能力の必要性和達成感を感じてもらうために学期の後半に90分内で鑑賞できる映画をビデオで観る機会をもつことも決まった。

【平成9年度授業反省と研究年報執筆打ち合せ】

平成9年度第2期末に、第2期の授業と9年度授業全体の反省会と本稿執筆の打ち合せを行った。これに基づき、この原稿が完成した次第である。最初の意見交換の後、本稿の第1次原稿の執筆は、第1節、第2節を大石が、第3節を秋が、第4節、第5節を福田が担当した。執筆された第1次原稿についてさらに4名で意見交換をした後、大石が全体を取りまとめるという形で完成した。

2. 千葉大学視察

平成8年11月26日に千葉大学外国語センターでコンピュータ利用による英語教育を視察させていただいた。配慮していただいたセンター長の金子亨先生、具体的に説明・案内をしてくださり、教育・研究の成果を資料としてくださった椎名紀久子、土肥充、高橋秀夫の諸先生に対して、お名前をここに記して感謝の意を表す。また、後日、千葉大学外国語センターのコースウェアの開発の中心となっている竹蓋幸生先生より、参考にとご著書『英語教育の科学』（株式会社アルク）を送付していただいた。同じくここに記して感謝の意を表す。

千葉大学外国語センターでは、大学の英語教育の目標は次の2種類のコミュニケーション能力の養成であると考えている。

(1) 基礎レベルのコミュニケーション能力養成

これは、会話をはじめとして手紙やファクシミリ、コンピュータ・ネットワークなどの文字によるコミュニケーションとニュース、ドラマや日常的な話題の講演の聞き取りにいたるまでの日常生活のあらゆる場面で必要とされる基礎的な事柄を英語によりコミュニケーションができるようにするということである。

(2) 専門レベルのコミュニケーション能力養成

これは、専門分野の学術情報を英語で理解し、英語で表現できる能力を養成するということである。具体的には、学会発表を英語である程度理解し、自分でも発表できるようにするほか、

英語論文を読んで理解し、英語でレポート、論文を書けるようにすることを含む。

外国語センターは、上記のように英語教育の目標を広範囲に達成したいとしながらも、ヒアリング指導が効果的に行われたとき、スピーキング、リーディングなどほかの技能にもその力が転移するという研究成果を踏まえて、ヒアリングの重点指導を優先している。

ヒアリング重視で、コンピュータで用いるコースウェアの開発にも取り組んでいた。上記の2種類のコミュニケーション能力に対応した基礎コースと専門コースの教材を一定の年数をかけて開発している。基礎コースは平成6年から平成9年までの計画で、専門コースは平成9年から12年までの計画で開発する予定であるとのことであった。このコースウェアは、ヒアリングの科学的指導法がないと言われてきている中、千葉大学が1980年代初頭から自然科学研究科を中心に実験研究を行ってたどり着いた3ラウンドの指導理論というものに基づいて開発されている。この理論を概説すると次のようになる。

学習者は、1つの聞き取るべきパッセージに対して3回（3段階）の設問への解答作業を行う。各ラウンドの設問内容の特質は次の通りである。

第1ラウンド

- 1) 大まかな概要
- 2) 繰り返し言われている事柄
- 3) 簡単な事実
- 4) パッセージなどの冒頭、末尾で言われている事柄

第2ラウンド

- 1) 5W1Hなどの詳細な客観的事実
- 2) 具体的な事実、事象

第3ラウンド

- 1) パッセージの中で言われていることをいくつか組み合わせ推論しないと答が出せない内容
- 2) 明言されていない話者の意図、態度、感情など

また、比較的難易度の高い自然なパッセージであっ

ても、学習者が成就感をもって学習を継続できるように、支援情報群が含まれている。この支援情報群には次のものが含まれる。

事前情報：聞き取りの準備として与える情報

ヒント情報：聞き取りの焦点

考え方の道筋

スキーマ関連の情報

参考情報：語彙、熟語、慣用表現関連の辞書的情報

補助情報：コミュニケーションの技術

異文化関連の情報

重要事項のまとめ

確認のための情報、解説

発展情報：当該教材と類似の場面でのコミュニケーション

活動に必要と思われる語彙、表現等の応用的情報

このような支援情報群に助けられながら、学習者は3回同じパッセージを聞き取ることになるが、これは1つのパッセージについて、第1ラウンドから第3ラウンドまで継続的に行うのではなく断続的に行う。つまり、いくつかのパッセージからなる教材セットについて、まず大まかな理解をする第1ラウンドの学習をそれぞれについて行い、次に正確・詳細な理解をする第2ラウンドの学習をそれぞれ行うという形で、同じセットを学習内容を変えて段階的に3回学習することになる。

また、コースウェアは学生が扱い易いように、始める時は起動してフロッピーディスクを差し込むだけでよく、終了するだけでフロッピーディスクに個々の学生の学習記録が自動記録されるようになっている。

以上のようにコースウェアを開発して、千葉大学で採用した学習形態は次の通りである。まず、設備としてパソコン50台を備えた教室が月曜1限から金曜5限までの25コマ分すべて英語教育に使用可能な状態にある。この使用可能な時間帯のすべてを一斉授業にあてずに、補習用の時間帯をある程度確保するという方針をとっている。基本的には、15コマを一斉授業にあて、残り10コマを補習用に確保するという配分比率を考えている。一斉授業の実績は平成6年度1クラス、平成

7年度4クラス、平成8年度13クラス（650名分）開講しているとのことであった。授業で使われていない時間帯や夏休み期間中は開放して、開発したコースウェアを用いながら、聴講者の補習だけでなく、聴講していない学生の自主学習や事務官の研修に活用されているという。

千葉大学を視察して感じたことは、英語教育の専門家とコンピュータ・情報処理の専門家が連携して、大学の英語教育を目に見える形でよくしていこうという姿勢があるということだ。そこには、自らの専門を研究しながら、実際にそれを応用し、さらに研究を深め、また実効をあげるという応用科学の理想的な姿が見える。我々は、千葉大学で学んだことを少しでも生かす形で新潟大学の英語教育に取り入れたいと考えた。様々な授業の組み立て方やヒントの与え方など参考にすべきところは多いが、特に、ヒアリング能力をつけることが他のスピーキング、リーディングの技能にもその力が転移するという研究成果に基本的に従って授業を工夫してみようと考えた。

3. 新潟大学のコンピュータ利用授業の形態

この新しい授業の取り組みにおいては、英語の基礎的な運用能力を向上させることを大きな目標とし、それを実現させるために、主にリスニングの力のレベルアップを図ることに力点を置き、同時に、英作文の力を高めることも大きな目標とした。これらを達成するために、教材として用いた『Quick English 日常会話1』、『Quick English 日常会話2』の中でも、特に、日常会話の映像・音声部分とそのスクリプトの英文、そして関連する練習問題を使用し、さらに、様々なプリントを作成して授業を行った。10単元の内容について、各単元を3時間（3コマ）で終了させ、それぞれのサイクルを各教官が次のような形で進めた。（具体例は第2期の例である。）

3. 1. 人文学部1年対象クラス

1 時間目 新しい単元の聞き取り練習

まず、クラス全体で、プリントを用いて、映像・音声から会話の概要を把握する練習を行った。この際、

語末音脱落
 that's () () accommodate
 リエゾン
 our overflow. They will () ()
 融合同化
 () () room () the
 リエゾン 語末音脱落
 same rate. () () our
 リエゾン
 staff will () () with your
 luggage and () () over there.
 I apologize for the inconvenience, Mr.
 Anderson.

Clerk Bellman! Kevin, () ()
 融合同化
 please take Mr. Anderson to the
 Regency Hotel. We're full here,
 () () have a room for
 末音脱落 鼻音同化
 () ().
 語頭H音消失 鼻音同化

Bellman Sure. Here, Mr. Anderson,
 () () carry () bag
 逆行同化 語末音脱落
 for you.
 Just follow me. The van's ()
 逆行同化
 outside.

Checking In

<基本ストーリー>

Clerk Good afternoon. May I help you ?
 Rob I need to check in. Do you have a
 reservation for Rob Anderson for this
 evening?
 Clerk How do you spell your name, Mr.
 Anderson ?
 Rob A-N-D-E-R-S-O-N

Clerk Thank you. Yes, here's your reservation, Mr. Anderson.

<分岐ストーリー1> [省略]

<分岐ストーリー2>

Clerk Good afternoon. May I help you?
 Rob Hello, I'm Rob Anderson. I believe
 you have a reservation for me.
 Clerk I'm sorry, Mr. Anderson. I don't
 seem to have a reservation in your
 name. Was that a confirmed reservation ?
 Rob Yes, it was. Here's the confirmation
 number.
 Clerk Ah yes, here it is. Unfortunately,
 we're full for this evening. However,
 there's another hotel a short distance
 from here that's helping us accommodate
 our overflow. They will provide
 you with a room at the same rate. One
 of our staff will help you with your
 luggage and drive you over there. I
 apologize for the inconvenience, Mr.
 Anderson.
 Clerk Bellman! Kevin, would you please take
 Mr. Anderson to the Regency Hotel.
 We're full here, and they have a room
 for him there.
 Bellman Sure. Here, Mr. Anderson, let me
 carry that bag for you. Just follow me.
 The van's right outside.

3. 2. 理学部1年対象クラス

1時間目 新単元の基本ストーリーの聞き取り練習
 プリントを配布し、ストーリーの概要に関する設問
 に答えさせ、続けて、音声聞きながらプリントのテク
 スト内に作られた空欄に適語を補充させた。このリス
 ニング訓練は、2～3回は空欄の直後で音声を停止

して聞かせ、残る2回は休止なしで聞かせた。学生を指名して解答を答えさせ、なるべく多くの学生にあたるようにした。リスニング練習の直後に、そのストーリー内の重要表現についてごく簡単な解説を行った。残りの時間は、当該レッスンの自主的学習にあてた。教材に含まれる文法・発音・文化的背景などの膨大な情報の中から、学生には、自らの興味にそって様々な情報の読み取りを行なわせた。

2時間目 前単元の分岐ストーリーの聞き取り練習

前単元のストーリーのバリエーションとして収録されている「分岐ストーリー」を用いて、前時間と同じ形態で授業を進めた。学生が、前時間の自主的学習の際に、分岐ストーリーのスクリプトを見ている可能性が高いが、リスニング訓練はスクリプトを見る前に行うという原則には拘泥しないことにした。この練習に加え、関連教材『Quick English 日常会話1』を用いて追加のリスニング訓練を行なった。

3時間目 1、2時間目の単元を利用した英作文テスト

まず、プリントを配布して解答後に回収し、後日、採点して返却し解説を加えた。この英作文問題には、教材中に現れる英文そのままの他に、それらを応用した問題を含めた。学生には、教材を見ながら解答することを許した。テスト対策として、和英辞典の使用を奨励した。英作文テストのあとの時間では、当該単元の3度目の自習を行なわせた。なお、このサイクルの中で必ず、返却した英作文テストの解説を行なった。

授業で用いたプリントの例

QE2 第5課 Having a Party at Home

全体把握：

- (1) トリシャはクレイグに対して、何に来るかどうかたずねていますか。
- (2) クレイグは、その誘いを受けましたか、断りましたか。

(3) クレイグから情報を得た、ソウニャはどうすることに決まりましたか。

(4) クレイグはソウニャを迎えに行きますか、それとも行きませんか。

細部聴解：

- Trisha (), Craig. Are you () a ()?
- Craig Hi, Trisha. () (). It's too nice () () to be ().
- What () () doing?
- Trisha I'm () () to have a (). Do you () to ()?
- Craig Yeah! Is it () right if I bring a ()?
- Trisha No (). The () the merrier.
- Craig Great. I'll bring some () and discs (), okay?
- Trisha (). See you ().
- Sonya See you ().
- Vanna Bye
- Sonya Hi, Craig! What are you () ()?
- Craig Not (). I () Trisha's having a party tonight. Do you () to go?
- Sonya Sounds () to me. What time?
- Craig I'll () () () at about a () to (), okay?
- Sonya Okay, see you later.

QE2 第6課 Making Airline Reservations 英作文課題

次の各文を英語に直しなさい。

- (1) ニューヨーク市のJFK空港行きの313便に関して私がしてある予約について電話しています。
- (2) 日本の成田空港行きの201便に関して私がしてある予約を変更したいのですが。
- (3) その予約ならちょうどここにあります。
- (4) その交通事故はまさにここで起こったのです。
- (5) 同じ日の早便と遅便の両方に空き席があります。
- (6) 大学図書館にはあなたの専門に関連する本が何千冊とあって利用できます。
- (7) 27日土曜日313便の予約と確認を致しました。
- (8) この会のメンバーとしてあなたを登録致しました。
- (9) 私は今してある予約をそのままにして確認することにします。
- (10) 遅便があるかどうか知る必要があるんだ。
- (11) 25日の早便に変更できるかどうか知る必要があるんだ。

3. 3. 工学部1年対象のクラス

1時間目 リスニングと英作文の練習

『Quick English 日常会話2』を用いて、リスニングの練習を学生個々に行なわせた。プリントを用いて、まず概要把握問題を、次にディクテーション問題を行なわせた。概要把握の問題を解答させるにあたっては、語彙のヒントやどの発話の後に注意を向けるかなどをプリント上で指示した。その後で、学生個々に本文の意味確認と音声・文法・語彙・文化に関する情報の読み込みを行なわせた。引き続いて、文法項目に関する

情報を参考にした基本的な英作文の問題を解答させた。プリントは、授業後に回収して採点し、後の時間に返却し、同時に解説も行った。最後に、ビデオのリスニング問題の準備練習として、教材付属の練習問題「カンガエル」を行わせ、後半の単語正序問題の正解すべてを書き取らせて提出させた。

2時間目 関連教材によるリスニングと英作文の練習

『Quick English 日常会話1』を使用して、リスニングの練習をクラスで一斉に行なった。次に、本文の意味確認と音声・文法・語彙・文化に関わる情報の読み込みと語彙項目に関する情報を参考にした基本的な英作文の練習を行なわせた。授業の進め方は、1時間目と同様である。時間に余裕がある場合にのみ、教材付属のテストに取り組ませた。

3時間目 別教材によるリスニングと英作文の練習

別教材『TOEIC練習』を使用して、クラスで一斉に概要把握の練習を行った。次に、本文の意味確認と音声・文法・語彙・文化の情報の読み込みを行なわせて、文法・語彙項目に関する情報を参考にした応用的英作文の練習を行なわせた。授業の進め方は、2時間目と同様である。最後に、教材付属の練習問題「理解度チェック」を用いて聞き取りテストを行った。この際、10問10点満点で日常点として考慮した。時間に余裕のある場合は、教材付属のテストに挑戦させ、満点をとったものには申告させた。

授業で用いたプリントの例

ビデオで“Making Phone Calls”の「基本ストーリー再生」を選択し、ビデオを何回も再生して聞き取る練習をしながら、次の設問に答えよ。なお、ビデオを再生して聞き取るときは、それぞれの設問だけに答えること。従って、次のようなやり方になる。

設問1を読む

→ビデオを再生して設問1に答える

→設問1にすべて答えられるまでビデオを再生して聞き取りをする

→設問2を読む

→ビデオを何回も再生して設問2に答える

(設問1) ミッシェル・ディアドンという女性が、ホテルで交換手にいろいろ尋ねます。ビデオを見て、尋ねた内容について、次の問に答えなさい。

- (1) ミッシェルの部屋番号 (room number) は何番ですか。
- (2) 交換手はミッシェルに幾つ伝言 (message) があったと言いましたか。
- (3) ミッシェルはどこへ電話したいと交換手に頼みましたか。
- (4) ミッシェルが電話をしたい相手の電話番号を、国際電話をかける時の番号で書きなさい。

国番号 (country code) - 市外局番 (city code)
- 電話番号 (telephone number)
() - () -
(-)

(設問2) [省略]

Making Phone Calls の会話テキストの文法・辞書・文化の説明を読んだり、Practice (Grammar, Vocabulary, Culture) の練習をしたりして、次の問に答えなさい。

1. 間違い電話がかかってきたときに、英語で何と言うか。
2. Johnに電話がかかってきたが、Johnが不在であることを言って、言付けをしてあげましょうかと申し出る時、英語で何と言うか。
3. アメリカ国内で (212) 983-2741に長距離電話をかけるとき、ダイヤルする番号は何番か。

4. アメリカの市内通話の公衆電話料金はいくらか。
5. 米国から日本の033 (236) 8415に電話するとき、ダイヤルする番号は何番か。
6. アメリカで市内通話を公衆電話でするとき、25セントでどのくらい長く話せるか。
7. 電話をかけた番号が現在使われていない場合、どんなふうに言われるか。
8. 交換手に電話をとりついでもらう時、相手方が話し中の場合、交換手は何と言うか。

前回の解答・解説

1. Sorry, you dialed a wrong number.

間違い電話

かかってきた時

I'm sorry. に続けて

You dialed a wrong number.

You've got the wrong number.

You have the wrong number.

I'm afraid there's no one of that name here.

2. I'm sorry. John's not here.

Can I take a message?

言付けをしてあげましょうか

Can I take a message?

May I take a message?

Would you like to leave a message?

Can I give him a message?

3. 1-212-983-2741

4. 25 cents

5. 011-81-33-236-8415

When calling another country from the United Kingdom and the United States, you must take the following four steps.

1. International Code UK 010

US 011

2. Country Code Japan 81

3. Area Code

日本から英米に国際電話をかける時

- ### 3. 4. まとめ

- ・ディクテーションに関して、個々の能力に差があり、解答時間が相当かかる学生が見受けられた。
- ・ディクテーションを、ヘッドセットを通して個人的に行なう場合と室内スピーカーでクラス全体で行なう場合で結果が大幅に異なる学生が見受けられた。
- ・ディクテーションに関しては、徐々にナチュラル・スピードの音声に慣れてきて、後半段階では、かなり力があがったと感じられる場面が少なからず見受けられた。
- ・自然な会話の速度には、学生は比較的早く慣れると感じたが、聞き取れているのにもかかわらず（これは発音を繰り返すことができたり、カタカナで書き取ることができることから分かる）、語句の意味を知らないために内容を理解出来ない学生が、特に理学部、工学部の学生に目立った。
- ・基本的な英作文については、時間的にも内容的にも適切な難易度であったが、応用英作文に関しては苦勞する学生もあり、また同じ誤りを繰り返す学生も見られた。

- ・教員側からの説明の中から自らが必要な情報を選択することができない学生が見受けられた。
- ・教員側からの「他動的な」説明よりも、学生自らの「自発的な」学習のほうが、知識の定着効果が高かった。
- ・学習意欲がさほど高くなくても、教員の側が具体的な目標を設定することで、学習進度があがる学生が少なからず見受けられた。

4. 授業に関するアンケートの分析

4. 0. はじめに

CD-ROM 英会話ソフト『Quick English 日常会話 1』、『Quick English 日常会話 2』を使った授業は、新潟大学においては新しい形態の授業なので、今後の授業改善に生かすために、学期末に受講生の意見を聞くアンケートを 3 クラスにおいて実施した。いずれも平成 9 年度第 2 期の授業を対象とした。使用教材は『Quick English 日常会話 2』である。アンケートはその趣旨を説明し、成績と無関係であることを断った上で、自分の意見に責任を持ってもらうために記名式にした。アンケート内容と 3 クラスの集計（回答者数は計 71 名）は以下の通りである。なお人文指定クラスではアニメ映画上映の機会がなかったため、アンケート番号(9)の質問を(9)'として示したように、パソコンに関する内容に差し替えて実施した。全体を通して無回答が 3 箇所あったが、「その他」に含めた。回答者の計が 71 名を超える項目は複数回答可の項目である。

4. 1. アンケートの内容と3クラス全体の集計
(集計数は各項目の後に括弧で示す)

以下のアンケート結果は、今後の授業改善の参考資料にするためのものであり、その目的以外に利用することとはなく、皆さんの成績には一切関係ありません。

学部 () 学生番号 ()

氏名 ()

(1) 授業のレベルについて。

1. 高度過ぎた。(4)
2. ちょうど良かった。(66)
3. 低過ぎた。(0)

- その他 (1)
- (2) 授業のスピードについて。
1. 速過ぎた。(5)
 2. ちょうど良かった。(65)
 3. 遅過ぎた。(0)
- その他 (1)
- (3) リスニングの力がついたと思いますか。
1. 大いについた。(2)
 2. かなりついた。(25)
 3. あまりつかなかった。(28)
 4. 全然つかなかった。(0)
- その他 (16)
- (4) 英作文課題の難易度について。
1. 難し過ぎた。(1)
 2. ちょうど良かった。(67)
 3. 簡単過ぎた。(2)
- その他 (1)
- (5) 英作文の力がついたと思いますか。
1. 大いについた。(1)
 2. かなりついた。(21)
 3. あまりつかなかった。(40)
 4. 全然つかなかった。(1)
- その他 (8)
- (6) 教材について。
1. Quick English だけで充分。(48)
 2. Quick English に、他のリスニング教材いくつか追加した方が良い。(21)
 3. まったく別リスニング教材の方が良かった。(0)
- その他 (2)
- (7) 授業方法について (複数回答可)。
1. このままで良い。(36)
 2. 授業中に、もっと学生の自学自習の時間をふやすべきだ。(9)
 3. 教員主導型で、教員がもっといろいろなことをやるべきだ。(2)
 4. スピーキングの練習を取り入れた方が良い。(17)
 5. もっと宿題を出すべきだ。(0)
 6. 授業時間以外の、空き時間に、この教材の自習ができるようにして欲しい。(28)
- その他 (2)
- (8) TOEFL のテストについて (複数回答可)。
1. 難し過ぎた。(51)
 2. 自分のリスニング・レベルを知ることができた。(31)
 3. 思ったよりも、良く聞き取れた。(2)
 4. 今後もこのようなテストに挑戦したい。(9)
- その他 (1)
- (9) アニメ映画 (複数回答可)。
1. 何も聞き取れない。ゆえに映画を授業で使うのは意味がない。(0)
 2. 聞き取りは難しかったが、雰囲気は楽しめた。(32)
 3. 案外、聞き取れた。(4)
 4. 字幕がないのが良かった。(4)
 5. 字幕があった方が良かった。(7)
- その他 (6)
- (10) 授業の回数について。
1. このまま、同じ教材で週に 2 回の授業で良い。(62)
 2. 同じ教材で、週 3 回くらいあった方が良かった。(6)
 3. この授業は週 1 回として、もう一つまったく別の内容の授業をさらに週一回受けた方が良かった。(3)
- その他 (0)
- (11) 自分の、今後の英語の勉強について (複数解答可)。
1. 特にリスニングに力を入れたい。(46)
 2. 特にライティングに力を入れたい。(8)
 3. 特にリーディングに力を入れたい。(3)
 4. 特にスピーキングに力を入れたい。(28)
 5. 全体的に、総合力をつけたい。(28)
 6. 英語の勉強の必要性を感じない。(1)
- その他 (1)
- (12) この授業を受けて
1. 英語が、より嫌いになった。(0)
 2. 今までと、同じ。(28)
 3. 少し英語が、好きになった。(38)
 4. 大いに英語が、好きになった。(5)

(9)' (複数回答)

1. 自分で自由に使えるPCを持っている。(2)
2. 自分用PCを買いたいと思っている。(14)
3. 大学に自由に使えるPCを置いて欲しい。(11)
4. PCに関心がある。(14)
5. PCは不必要だ。(2)
- その他 (1)

4. 2. クラス別集計

回答学生の学部、入学年度の構成

人文学部指定クラス26名：人文26（H9年度入学生25名、H8年度入学生1名）

理学部指定クラス 22名：理20名（H9年度入学生19名、H7年度入学生1名）人文1名（H8年度入学生）農1名（H7年度入学生）

工学部指定クラス 23名：工22名（H9年度入学生21名、H8年度入学生1名）人文1名（H9年度入学生）

	人文	理	工	合計
(1) 1.	2	2	0	4
2.	24	19	23	66
3.	0	0	0	0
その他	0	1	0	1
(2) 1.	3	1	1	5
2.	23	20	22	65
3.	0	0	0	0
その他	0	1	0	1
(3) 1.	0	1	1	2
2.	6	7	12	25
3.	13	9	6	28
4.	0	0	0	0
その他	7	5	4	16
(4) 1.	0	1	0	1
2.	25	21	21	67
3.	1	0	1	2
その他	0	0	1	1
(5) 1.	0	1	0	1
2.	6	7	8	21
3.	16	12	12	40
4.	0	0	1	1

その他	4	2	2	8
(6) 1.	15	18	15	48
2.	10	4	7	21
3.	0	0	0	0
その他	1	0	1	2
(7) 1.	10	13	13	36
2.	2	2	5	9
3.	0	2	0	2
4.	11	3	3	17
5.	0	0	0	0
6.	9	9	10	28
その他	2	0	0	2
(8) 1.	20	16	15	51
2.	9	11	11	31
3.	0	0	2	2
4.	3	4	2	9
その他	1	0	0	1
(9) 1.	*	0	0	0
2.	*	18	14	32
3.	*	1	3	4
4.	*	4	0	4
5.	*	2	5	7
その他	*	2	4	6
(10) 1.	23	19	20	62
2.	3	2	1	6
3.	0	1	2	3
その他	0	0	0	0
(11) 1.	20	14	12	46
2.	4	2	2	8
3.	2	1	0	3
4.	16	5	7	28
5.	10	8	10	28
6.	1	0	0	1
その他	0	0	1	1
(12) 1.	0	0	0	0
2.	12	9	7	28
3.	13	13	12	38
4.	1	0	4	5
参考				
(9)' 1.	2	*	*	2

2.	14	*	*	14
3.	11	*	*	11
4.	14	*	*	14
5.	2	*	*	2
その他	1	*	*	1

4. 3. 項目別回答分析

(1) 授業のレベルについて。

受講者の93%が「ちょうど良かった」と答えている。『Quick English』が学部を問わず、大学一年生のレベルに合致した教材であることがわかる。

(2) 授業のスピードについて。

92%が「ちょうど良かった」と答えている。全部で10課ある教材の1課を3回で進む方法が妥当であったことが示されている。

(3) リスニングの力がついたと思いますか。

この項目は学生の主観的な自己評価を問う項目である。この自己評価と3クラス同一内容で実施したTOEFLのリスニング練習テストの結果を比較すると興味深い。語研のTOEFL Listening ComprehensionのTEST(1)を利用した。このテストは実際のTOEFLのリスニング・テストと同じく30分、50問のマーク・シート方式からなり、レベルも実際のテストと同レベルである。このテストは後期授業開始直後(10月半ば)と学期末(1月末)の2回、まったく同じ内容で実施したもので、リスニング能力の伸びを一定の正確さで測定できたものとする。人数および平均点は2回とも受験した学生についてのものである。

表2 (TOEFL 第1回と第2回の比較) 50点満点

	第1回 (10月)	第2回 (1月)	伸び
人文クラス (25名)	20.76	23.12	+2.36
理クラス (22名)	17.16	20.76	+3.59
工クラス (18名)	16.66	17.61	+0.95

日本の大学1年生に期待される目標水準は4割、つまり20点と考えられる。表2とアンケート全体集計の項目(3)および表1の項目(3)とを比較してみる。全体としては、リスニング力が「かなりついた」と「あまりつかなかった」が半々である。「その他」が16とかなり多い。その内容は、「かなりとまでは行かないが、少しはついた」というのがほとんどである。「少しはついた」という回答例をアンケートに入れるべきであったかもしれない。この「その他」を加えると、全体としては、リスニング力がアップしたと感じている学生が「あまりつかなかった」を上回る。授業の第一の目標はリスニング能力の養成であるので、アンケートからは、比較的望ましい結果が出ている。しかし、「あまりつかなかった」が人文クラスにおいて目立つのは興味深い。これは、最初から人文の学生には比較的英語が得意な者が多く、自分の英語力の伸びに対する期待度が高いことをうかがわせる。これと対照的なのが工学部クラスである。このクラスにおいては、「かなりついた」という主観的自己評価が3クラス中で一番多い。しかしTOEFLのテストでは依然として苦戦している。工学部生は、(2)の項目でも「英語が好きになった」が「少し」と「大いに」を合わせて3クラス中で一番多い。工学部生は『Quick English』で学ぶことによって、良いスタート・ラインに立ったと言えるが、もともと英語が苦手な学生が多く、リスニングといえども、英語の総合力と大いに相関があるため、一足飛びに力をつけるのは困難なのであろう。理クラスが一番伸びが大きい。理学部生の英語の潜在的能力を示すものかも知れない。ただしこのクラスでは、12月半ばに同形式・異内容のTOEFL TEST 2を一回(TEST 1と同じく30分)余分に練習として実施している。それが多少プラスの要因になったかもしれない。

(4)と(5)英作文に関して。

授業の第2の目標は和文英訳である。教師が作成する英作文課題の難易度は「ちょうど良かった」が94%を占めている。しかし、英作文の力がついたかどうかについては、「あまりつかなかった」(56%)が「かなりついた」(30%)を大きく上回っている。これは今後の課題である。作文問題の答えをモニター画面から

見つけて、ただ写しているだけでは力はつかない。教材の中の基本形を部分的に応用した問題を数多くこなさないと力は着かないだろう。そのためには、英作文の宿題を多く出す必要があるのかもしれない。項目(7)で宿題を望む学生はゼロという数字が出ているが。

(6) 教材について。

『Quick English』だけで良いとする回答が68%を占めた。他のリスニング教材の追加を望む声も相当数あるが、『Quick English』の情報量は非常に多いので、他教材を併用するとしても、ごく補助的なものにならざるを得ない。

(7) 授業方法について。

「このままで良い」とするものが一番多い。次いで注目すべきは、放課後など授業時間外にマルチ・メディア教室を利用して、この教材の自習をしたいという学生がかなり多い。『Quick English』はリスニング訓練の効果上、未習の課を予習することを禁じているが、既習のレッスンの復習のために自習するのは、大いに望ましいことである。本学に語学や音響機器の知識を持った専従の助手がいないのはまことに残念なことである。LL教室や、マルチ・メディア教室のすぐ脇に部屋を作り、そのような助手がそこに常駐するのがもっとも望ましい。そうなれば、『Quick English』の授業外自習もやりやすくなる。

リスニングだけではなく、スピーキングの訓練も望む声もある。興味深いことに、人文学部生の中にこの希望が多い。しかしこの授業はリスニング訓練と英作文訓練が主体であり、スピーキングの指導は別のクラスでやるしかないと考える。ただし、ごく補助的に日常生活について授業の最初に、英語で「話す」ことなら可能である。千葉大学の研究成果でリスニング能力の向上がスピーキング能力に転移することが示されているが、学生からのこの要望にどのように応えるかは今後の課題である。

(8) TOEFLのテストについて。

「難しい」と感じた者がほとんどであった。これは当然だが、もっとチャレンジ精神を持って欲しいもの

である。このテストはリスニングの目標水準を学生に知らせる目的も持っているので、「今後もこのようなテストに挑戦したい」が9名なのは少し寂しい。ただ31名が自分のリスニング・レベルを自覚したようであるから、今後の勉強が楽しみである。

(9) アニメ映画について。(理、工クラスのみ回答)

ディズニーの名作『アラジン』を一回放映した。字幕はなかったが、おおむね好評だったと言える。アニメや映画を授業で使うべきでないという声はゼロであった。リスニングの面白さを味わい、勉強の目標を持つためには、名画をたまに鑑賞するのも良いと考える。

(10) 授業の回数について。

87%が現状のまま週2回が良いとしている。これは妥当な回答であろう。

(11) 今後の英語の勉強について。

『Quick English』を用いたこの授業がリスニングを第1目標にした授業であり、アニメやTOEFLのテストなどで、自分のリスニング力不足を痛感したためか、「リスニングに力を入れたい」という回答が一番多い。次いで「スピーキング」と「総合力」である。注目すべきは、「リーディングに力を入れたい」は複数回答にもかかわらず、たった3名である。自信があるのか、または高校までいやというほどやらされたからか、とにかくリーディングの人気のなさは際立っている。本来、英語の文献を速く正確に読める能力は非常に重要な能力であり、英語の総合力の大きな柱とも言えるのであるから、リーディングの効果的な指導法に関しては、英語教育界全体の課題であろう。

「英語の勉強の必要を感じない」とした者は1名である。学生はなんらかの意味で今後も英語学習の必要性を感じていると言える。

(12) この授業を受けて。

「少しは英語が好きになった」と「大いに英語が好きになった」を合わせると、61%になり、「今までと同じ」(39%)を大きく上回る(ただし「今までと同じ」には、ひょっとしたら「英語が好きな状態が変わ

らない」という者もいるかもしれないので、この設問は曖昧性を含む)。「英語がより嫌いになった」はゼロであった。記名式のアンケートであったことの影響も多少考えられるが、全体として好意的な反応であったと言える。

(9) パソコンに関する質問 (人文クラスのみ回答)

人文の学生であっても、パソコンに関心を持つ学生が多いことがわかる。さらに「大学に自由に使えるPCを置いて欲しい」と回答した者が25%いる。理、工クラスならもっとこの数はふえたであろう。学生が自由に使えるPCの設置やマルチ・メディア教室の放課後使用の拡大を検討する必要がある。

4. 4. 「その他」と「自由意見」から

一番多かったのは「パソコンを使った授業が新鮮だった。もっとこのような授業を増やしてほしい」という意見だった。その次に「この授業は楽しかった」であった。次いで「CD-ROMの貸し出しを希望する」や「マルチ・メディア教室の放課後自由開放を望む」だった。その他、興味深い意見をピックアップすると「自分のリスニング力のなさを痛感した」、「もっとゆっくりしたスピードの英語から入って行きたかった」、「スピーキングをまったくやらないのが残念だった」、「一人一人モニターに向かってする授業はなにか寂しい」、「コンピューターで学ぶ会話が、果たして人と人とのコミュニケーションに役立つかどうか疑わしい」などがあった。最後二つの意見はいずれも人文学部生からのものであった。考慮に値する意見である。

4. 5. むすび

『Quick English』の授業は新しい試みである。アンケート結果をみれば、学生は次のような点に新しさを感じたことがわかる。

- (a) コンピューターを使う。
- (b) 教材の会話が実用的である
- (c) 教材の英語のスピードが完全にナチュラル・スピードである。
- (d) 教師主導ではなく、自分のペースで学べる。
- (e) 自宅での予習・復習が不要。

(f) 宿題がない。

(g) 辞書を引かなくて良い (教材の中に「辞書」という欄がある)。

これらの点で、高校までの学習とは、かなり異なった新しい体験だったことは明らかである。(c)に関して言えば、授業は学生の自学自習が中心となり、従来の教師中心的授業方法とは大きく異なる。しかしこの授業の担当教員は、課題の準備と結果の採点等を毎回やることになり、実は非常に多忙である。授業中もリスニング・テストの実施、英作文課題の返却・解説、質問受け付けなどいくつかの仕事がある。しかし重要なのは、この授業は、あくまで学習者中心であり教員の解説などを最小限にとどめた方が良いということである。

5. まとめ

平成9年度に4名のチームを組んで、コンピュータ利用による英語授業に取り組んでいくつかの結果を得た。一つは、第4節のアンケート分析に見られるような学生からの反応を得たことである。この反応や教員側の反省から、授業の基本的方法は現在のままで良いと思われるが、利用価値のある教材だけに、さらにいろいろ工夫する余地があることがわかった。例えば次のような点である。

(1) 英作文に関して。

○英作文力養成のために、教材の基本形から出発して、徐々に応用の幅を大きくして行くような課題問題を作成する。

○場合によっては、英作文課題を宿題として課す。そうすれば辞書も使うし、自分で考えるようになる。

○完全な自由英作文を課す時があっても良い。

(2) 第3節で触れたことであるが、語彙力の不足のために聞き取れていながら内容理解に困る学生が見受けられたが、語彙力をつける訓練も組み込んでいく工夫もある必要がある。

(3) 補助的な工夫(もちろん、すべて行う必要はない)

○時には、コンピューターでの勉強から離れて、学生同志、または教員と学生の間で、英語を話すための課題を出す。

○TOEFL あるいは TOEIC などの練習・テストの回数をもう少し増やして訓練する。

○リスニング能力をさらに養成するために、授業の最初に、毎回英語の歌を聞かせ、空欄補充のリスニング訓練をすることも可能である。

○アニメや名作映画の鑑賞

(4) 既習レッスンに限り、放課後にマルチ・メディア教室で復習できるよう検討する。

(5) 学期末には、TOEFL に限らずなんらかの方法で、リスニング力、さらにできれば英作文力の伸びを測定するようにする。

授業形態については、当初目的としていた授業中に学生自身が作業する時間を十分とるという形をとれたと考えている。そのかわりに授業外で教員が行う作業は飛躍的に増加した。しかしながら、この教員側の作業はまだ続ける必要がある。第3節のまとめでも触れたことであるが、学生の自発的な学習の方が知識の定

着効果が高いと考えられるので、できるだけ学生に興味をもって作業させるように教材そのものの研究と課題の与え方の研究をしていかなければならない。

TOEFL を使って客観的に教育効果を計ろうと試みたわけであるが、色々な方法と効果との関連性についても今後蓄積が必要である。

千葉大学を視察して得たものも、異なる教材の中でどの様に生かしていくかも今後さらに検討していくことになる。また、コンピュータ利用による英語教育に限らず、新潟大学の英語教育について、新潟大学の英語教育の専門家の助言も仰ぎたいと視察して感じた。

最後に、チームを組んで同一教材に取り組んだため、一人で担当する授業より多くのアイデアが出てきた。同時に、いい意味での競争が励みになり、どこかの授業でうまく効果があがらない局面が出てきても力を合わせて乗り切るという連帯感が生まれた。この意味ではコンピュータ利用による英語教育はうまく第1歩を踏み出せたのではないかと思う。平成10年度も同じチームでコンピュータ利用の英語授業に取り組むことになっており、資料の蓄積を続けたいと考えている。